

主の2016年9月4日
第92号 創立記念号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
牧師 松永政和
☎590-0114
堺市南区槇塚台1-1-5
TEL/FAX 072-291-9532
メール izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■教会標語■
『キリストを証する教会』



岩の上に建てられる教会

牧師 松永 政和

「主はわたしの岩」、「救いの岩」。旧約聖書は、主である神をしばしば「岩」に例えています。そして、「わたしの足を岩の上に立たせ」てくださる神、その「救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう」と謳います。

一方イエスは岩についてもっと具体的に語っています。「岩の上にわたしの教会を建てる」と言われ、岩の上に家を建てた賢い人の譬えを語ります。旧約の詩人が謳う岩も、イエスが建てようとしてくれる土台である岩も同じ神を指し示しています。

岩の上に家を建てることについて少し考えてみます。どう考えても平地に建てる方がはるかに楽であり、早く立てることができましよう。岩の上だと、まず柱をしつかりと立てるために固い

岩を掘削しなければなりません。相当の労力と時間が必要です。資材を岩の上まで運び上げるにはかなりしんどいことです。しつかりとした岩の上に教会を建てるのは簡単なことではありません。

それでも、「岩の上にわたしの教会を建てる」と言われるイエスに励まされ、神に見出された人たちが集まり、互いに協力し少しずつ建てていきます。もちろんイエス自らが先頭に立つてくださっています。

こうして、何もなかったけれど、ただ一つ救いの岩だけが見えていたこの地に一つの教会が建てられました。

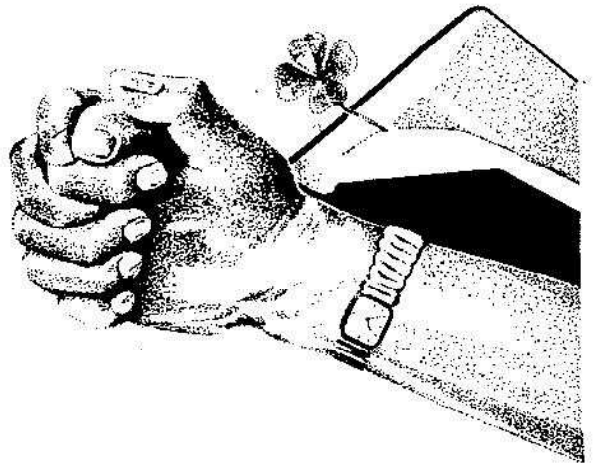
でもそれで終わりではありません。この教会は、自分たちだけが憩う所ではありません。多くの人が寄り集まる

ことができるように、岩の上に通じる道や階段も造らなければなりません。案内板も必要でしょう。こうして、岩は輝いていきます。集います者たちの讚美の声が岩の上に響きます。

岩の上の教会は、神を礼拝する所です。神を賛美する所です。神に叛くという罪を犯してしまう私たちに代わって十字架に架かってくださったイエスキリストを拝むところです。

そのためには私たちも、それにふさわしい幾つかのことをしなければなりません。それを少し箇条書きにしてみました。

- ①「喜んで礼拝に参加します」。神を賛美し、神の言葉を聞くのですから。
- ②「喜んで献げます」。しぶしぶ献げていては喜びになりません。
- ③「喜んで祈ります」。賛美と感謝の祈り、自分の願いも祈りましょう。そして執り成しの祈りです。心にかかる人の名を挙げて執り成しの祈りをします。
- ④「喜んで証します」。一番難しいかもしれません。何でも良いのです、神のことイエスのこと、自分との関わりについて自分の口や行いを通して証します。



⑤「日曜日だけクリスチャンは淋しいです」。神は日曜日だけでなく、四六時中あなたの傍らにいます。声をかけてみてください。そこで、週日にも、少しの時間を割いて聖書を読む。祈り、讚美歌を歌う。そのような生活リズムを作りたいです。

⑥「日曜日の礼拝出席のために他のものを捨てる」。そんな習慣ができますように。

他にもあるでしょうが、このようにして岩の上に建てられた教会への道は

できていきます。そこでは親しい人、初めて会う人の喜びに出会えるのです。

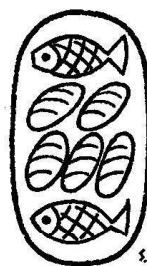
これが「伝道」なのです。伝道といいますと、「わたしには無理」とか、「誰かできる人にしてもらって」、「牧師の仕事」と思ってしまうがちですが、いえいえどうして、先ほど箇条書きしました事柄を喜んでしますなら、それは間違いなく「伝道」です。日常的にも「今日は、こんなことがあった」と誰かに話すように、「今日、教会でこんな話を聞いた」と話すことができます。

教会創立何十周年記念といつて、過ぎてきたことだけに留まるのでなく、明日の教会をどのようにしていこうか、一緒に考えていくことも大事なことであります。

主イエスが導いてくださり、成してくださいますから私たち、大胆に明日のヴィジョンを語って参りましょう。

Ω





「信仰とは」
ビザンティン美術

中山 アイ子

「中世ビザンティン美術」を求めて、マケドニアを訪ねました。

マケドニアの首都・スコピエの郊外にある、美しく紅葉した林の中を登って行くと、ネレツイという小さな村に着きました。林の中に美しい5つのドームを持つ赤レンガの修道院が目に見え込んできました。病人を癒す聖者・パンテレイモン修道院です。1954年に創建されました。

修道院の聖堂には、ビザンティン美術史上屈指のフレスコ画の傑作があり、心ときめかしの聖堂の中に入りました。なんと荘厳な雰囲気なのでしよう！静寂が立ち込めた空間は、フレスコ画で壁一面を覆っていました。



聖パンテレイモン修道院
5つのドームを持つギリシャ十字式のビザンティン・ロマネスクの修道院

「ビザンティンブルー」と言われている高価なラピスラズリーの紺青の絵の具が、ふんだんに使われて描かれていて感動しました。

キリストの生涯の物語、マリアの生涯、聖者たちが聖堂の壁一面に描かれています。

中でも有名な傑作が『嘆きの聖母』（ピエタ）のフレスコ画です。十字架から降ろされたイエスを抱え、嘆き悲しむ聖母マリアの表情から、悲嘆と苦痛がひしひしと伝わってきます。ビザンティンの画像学は神と人、死をめぐる悲しみが中心です。喜怒哀楽や微妙な心理をこんなに繊細に表現しているとは驚きでした。十字架降下から、自

分のもとに帰ってきた息子イエスを抱きしめ、号泣するマリアの悲しみは心うちます。ビザンティン美術は、悲しみの感情と人間の激情をみごとに絵画化していると思いました。

アルバニアとの国境沿いのオフリドの街を訪ねました。中世ビザンティン美術の宝庫です。アドリア海とエーゲ海を結ぶエグナティア街道上にあり、古代ローマ時代から巡礼地としてまた交易の道として栄えました。絶えず人々を魅了してきたオフリドは、中世の面影を今も残しています。美しいオフリド湖のすぐ傍に、聖ソフィア大聖堂があり、中に入ると見事なフレスコ画が、天井・壁全面に描かれていて思わず歓喜の叫びをあげました。

フレスコ画の多くは一二世紀末の作で、聖書の場面が、繊細で流麗なタッチで描かれていました。ここでもビザンティンブルーの高貴な鮮やかな色に圧倒されました。

東ローマ帝国で、「イコンは偶像か？否か？」という予期せぬ聖像論争がおこりました。726年のことです。皇帝は「イコン」を偶像と定め破壊させますが、百年以上の間に皇帝が変わり、843年にイコン崇拝が認められ、たくさ

んのイコンが描かれるようになりまし
た。でも何故イコンは偶像ではないと
されたのでしょうか。

神さまご自身が人間になられて(受
肉)、この地上で生活をされたので、神
さまを描くことが出来るというので
す。イコンは大切でもイコンそのものが
神さまではありません。人の姿の中に
人を超えた聖なる存在を描けるか
です。イコンは窓＝アイコンだとい
うのです。

「美術は神を描きつるかどつか」の論
争が起こり、主の祝福に授かれるよう
に、見ないで聞き信じる信者に、人を
超えた聖なる存在をイコンの中に描
うとしました。これがビザンティン美
術です。

世俗化したルネサンス期の西・ロー
マ帝国の画家たちは、細部を注意深く
観察し、沢山の彩色を使うために、時
代の風潮や物質的な美しさにおいて
は、見事な美術表現ですが、物質を超
えたキリスト教の価値観と、時間と空
間を超越した真実を描き切れていな
いように、私には思えてなりません。
しかし、ビザンティン美術は、その前
で瞑想する者に、嘆きからくる悲哀でな
く、慰めと希望を孕む悲哀を感じさせ



『ピエタ』マリアは深い悲しみに表
情を歪ませ、その悲嘆の描写からマ
リアの慟哭が聞こえてくるよう
でした。

てくれます。イエスさまの顔には、悲哀
が見え、優しさと赦しに満ちていま
した。

偶像としてイコンを破壊するという
危機を乗り越えて、修道院は、聖ソフ
ア聖堂の内陣の天井全面に『昇天』『フ
レスコ画』を描きました。

神を描くことが出来るか否かの論
争に勝利したことにより、イコンを弁
護する立場の修道院が増え、財政も豊
かになり、ビザンティンブルーと言わ
れている高価な美しい紺青の絵の具
を、ふんだんに使って表現することが
可能になりました。

フレスコ画は、漆喰(石灰)が塗られ

たばかりの壁に、金属製酸化物を顔料
として水で溶いて描きますが、乾くと
擦っても水で洗っても落ちません。石
灰には色を定着させ保護する力があ
るからです。しかし石灰が乾くともう
顔料を受け付けないので、上から描い
たり、描き直したりすることは最早出
来ません。こんな困難を乗り越えて、
天井や壁全面に『昇天』などを描いた
フレスコ画家の根気と忍耐力と才能
には、吃驚と尊敬の念でいっぱいにな
りました。

「信仰とは、信じている事柄を確信し、
見えない事実を、確認することです。」

ヘブライ人への手紙11章1節

ビザンティン美術に描かれたイエス
さまやマリアさまや聖人たちの極端
に身体を曲げた姿勢や表情、体の部分
の強調などの色々な動作は、古くから
の信仰的な決まりがあることで、ひと
つ一つの意味を理解するのは難しいの
ですが、私は「信仰と真の謙虚さ」の表
現だと思いました。どの修道院の聖堂
にも似たようなイコンが描かれていま
した。

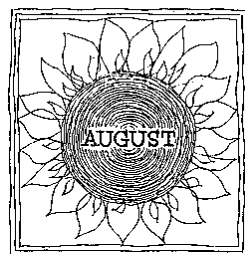
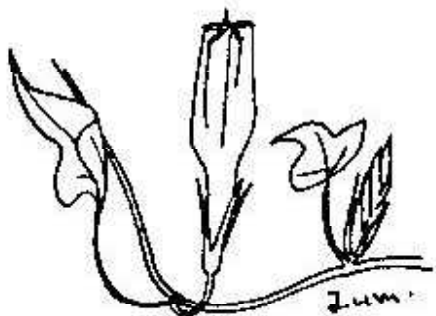
死の悲しみや、哀れみ、主の慰めな

どの感情を中心に描かれたのがビザンティン美術だと思えます。

あるがままの自分を見つめ、自分の至らなさを、神さまから遠く離れた日々の生活をしているかを反省し、罪に敏感になれば、謙虚になれるのではないかと思えます。

今日は野にあつて、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神さまはこのように装ってくださるのですから、こころを高く上げて、愛する神さまを見上げ、謙虚に生きたいと願っています。

Ω



夏期学校に参加して

求道青年 奥田 佳也

8月2日から4日まで信太山青少年活動センターにて堺川尻教会とともに、「神さまといつもいっしょ」というテーマの下で夏期学校が行われました。

今回の夏期学校は例年とは異なり、中学生が二泊三日、幼稚科と小学生が一泊二日という、変則的なスケジュールの中で行われました。自分自身は三年ぶりの参加で、また今回は初めてスタッフとして参加するということで、はじめはとても緊張していましたが、時間がたつにつれて緊張もほぐれ、スタッフとしての働きも少しずつできるようになりました。今回の夏期学校で

は最終日に中学生がメインとなってヨセフ物語の劇を演じることになっていました。そこで開校礼拝の時に塚本先生から説教で聞かせていただいたお話を劇として演技することで、さらに詳しくヨセフ物語を学ぶことができたと思えます。

初日はその劇に向けての準備を行い、中学生との仲を深めることができたと思えます。また夜には、証を聞かせていただきました。「信仰とは何なのか?」などとても身に染みる熱いお話を聞かせてもらいました。この話を聞かせていただいたことで「洗礼を受ける」とはどういうことなのか?」などということをさらに深く考えるようになったと思えます。

二日目には、子供たちが到着するまで、昨日の続きで劇の練習を繰り返して、子供たちが到着してからは本格的にスタッフとして動くようになりました。分級では僕の役割は一日目とは異なり、小学生が絵具を用いて劇の背景となる絵の色塗りのお手伝いをしていました。野外炊飯でのカレー作りやキャンプファイヤーなどでも、これまでの生徒として参加していた夏期学



校では自分に与えられた役割をこなしていくことを楽しんでいましたが、今回はスタッフとして子供たちに目を配りながら、スタッフとしての作業を進めるといことがとても難しく、普段の大学生活では経験できないような経験をすることができました。

三日目は朝から前日の続きでヨセフ物語の準備を進め、プールに入って遊び、最後にこれまで分級の中で準備をしてきたヨセフ物語の劇を発表しました。中高生が分級の中で学んだ内容と、幼稚科・小学生が準備した背景とを合わせて、劇としてまとめることができていて、素晴らしい劇をすることができたと思います。この後、堺川尻教会に移動し、閉校礼拝を捧げ解散となりました。二日間だけでしたが、共に過ごした子供たちとの別れはとても寂しく、子供たちが保護者とともに帰っていく姿が見えなくなるまで見

送っていました。

スタッフとして参加させていただいた三日間は、これまでよりも子供たちと共に過ごす時間が長かったので、子供たちと接することの難しさをあらためて感じ、また同時に子供たちと接することの楽しさを感じることもできたと思います。今年はスタッフとして仕事をしなければいけない場面でも、子供たちと遊んでいて、周りの先生方に迷惑をかけてしまった場面があったので、常に周りの状況を見て行動できるようにしていきたいと思えます。この三日間の間、神様が共にいてくださって、充実した夏期学校を実施することができたと思います。また今年の夏期学校で学んだことを生かし、周りの人の役に立てるようにするために、来年度の夏期学校にも参加したいと思います。



神様に祝福された夏期学校

教会学校校長 時武 哲也



今年も堺川尻教会と合同の夏期学校を持つことが出来ました。心より神様に感謝します。

私は昨年怪我で参加出来なかった為、2年ぶりの夏期学校になります。場所は3年ぶりに大阪市立信太山青少年活動センターです。昨年まで幼稚園の年長さんから高校生まで2泊3日で行われましたが、今年には中高生が8月2日から2泊3日、小学生までの子供達は8月3日から1泊2日のプログラムが組まれました。

私は小学生までの子供達と一緒に8月3日の朝から参加です。朝、堺川尻教会に集合。教師、スタッフ一同は

早めに来て準備をしながら子供達を迎えます。しばらくすると「先生来たよ！」と目を輝かせて担任の先生のところへかけよる子供達の姿がありました。泉ヶ丘教会からは初めて参加する子供もいて、みんなと上手くやれるかな？仲良くなれるかな？と思って見えていましたが、みんなが集まる頃には同じ学年で集まって楽しくお話ししていました。

みんなそろっていよいよ出発です。お祈りしてバスに乗り込み、家族に手を振って目的地へ。

到着したらオリエンテーションです。前日から参加して到着を待っていていた高校生や大学生がセンター内の注意事項を説明してくれました。今年は中高生も2日目、3日目はスタッフとして小学生までの子供達を見られます。2年ぶりに見た彼らの成長した姿にビックリ。神様は毎週の礼拝、教会生活を通して一人一人を養い成長させて下さっている事を実感しました。

開校礼拝が持たれ、夏期学校のテーマ「神様はいつもいっしょ」(聖書 創世記45章1節から8節 ヨセフ物語)を通して歴史の中で働かれる神様の御

業と神様の愛を知らされた。神様は私たち人間の考えをはるかに超えた仕方でもヨセフを選び、イスラエルの民を導き救い出されたように、私たちに命を与え、愛して下さいている神様は、私たちの思いもしない方法で人生を導いて下さる。どうして?...、と思えるような出来事も神様が私たちに与えて下さったもの。神様はどんな時でも私達を見捨てず愛を持って導いて下さっている。子供達もそのことを信じ



夏期学校の作品

て歩んで行ってほしいと思います。開校礼拝後の仲良しゲームでは、野外炊飯の縦割りの班ごとにヨセフ物語に関連した対抗ゲームを行い、体や頭を使って楽しい時間を過ごした。各班一つになったかな？ 野外炊飯が楽しみです。

お昼ご飯を頂いた後は合同分級です。小学生までの子供達は学年ごとに分かれて、明日の作品発表のためヨセフ物語の場面作りを行います。私は小



夏期学校の作品

学1年生のクラスに入った。1年生は自分流に星と麦に色を塗り、画用紙に張り付けていく。みんなすごい。子供達は素晴らしい賜物でいっぱいです。終わった人から夏期学校の想い出にうちわ作り。絵を書いたり、シールを貼ったり、みんな真剣に取り組み素敵のうちわを作り上げていく。

野外炊飯では、縦割りの班ごとにカレー作りをめぐした。火をおこしている間に、それぞれ担当を決めて、苦手なことは助け合いながら野菜や肉を食べやすい大きさに切っていく。汗を流しちよっぴり悪戦苦闘気味ながら、ついにカレー完成!!味はどうかかな?やっぱり自分たちで作ったカレーライスはとびっきりおいしくて、おかわりしました。もう満腹。

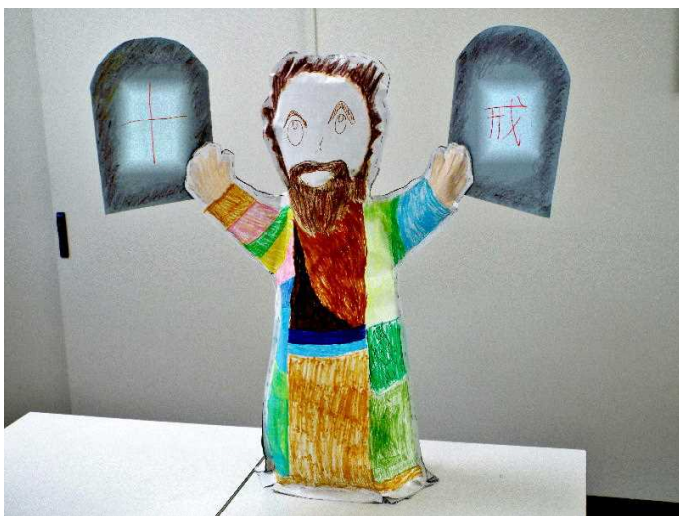
後片付けが終わると今日最後のプログラム、キャンプファイヤーです。まだ明るさの残る中、薪をセットして、みんなで輪になって座ります。司会者の第一声、「私たちのまわりを見てみよう。この自然の一つ一つは私たちのために神様が愛をこめて創られたものです。この中でキャンプファイヤーと一緒に楽しみましょう。」

キャンプファイヤーの定番?なにや

ら怪しげに変装した高校生たちによって薪に火がつけられると、幼稚園児から大人まで一緒に大きな声を出し合い、体を動かしてゲーム開始。キャンプファイヤーが終わる頃にはみんなが一つになっていくのを感じた。キャンプファイヤーの体験はいつも夏期学校の良い思い出です。最後に神様に感謝の祈りを捧げてキャンプファイヤーを終えた。

私はここでみんなとお別れし、このような夏期学校の恵みを与えて下さった神様に感謝しました。

子供達がこの夏期学校を通して、神様と一緒に歩む人生となりますよう願っています。



教会学校では今年度、聖書が証する神様の大きな救いの歴史をたどっています。今は旧約聖書を読み進めており、分級では神様から十戒を授けられたモーセをつくりました。



アメリカ訪問記

村田 幸子

What is your favorite in Pennsylvania, Bonnie ?(ペンシルヴェニアで一番好きなことは何。ボニー?)

1年前の8月15日は、ホストファミリーのお父さんとお母さんの金婚式パーティーに招待されて、アメリカはペンシルヴェニアに行ったが、今年は私の率いる合唱団の卒団性が、尺八を習ってほしい、と誰かに聴いてもらう機会がほしい、ということ、アメリカでやってみたら?と7月27日から8月17日の役3週間の滞在で行って来ました。

2週間をペンシルヴェニアで、次の1週間をテキサスでの滞在中、旅行会社のツアーとは違う貴重な経験をしてきたのは、いつものことである。自分の年齢を考えると、13時間の飛行機での

旅は、きついはずである、が神様は私に元気という賜物を下さっている。私よりも若いホストファミリーたちも驚くほどのエネルギーで、3週間の旅を終えて、無事帰国し、時差ボケも何のそので、もう10日を過ぎた。

3週間の滞在、当然主の日は3回迎えることになる。アメリカはキリスト教の国、クリスチャン家族が当たり前なので、日曜日は教会へ…。まずお父さんとお母さんの母教会、Middlecreek Christian Church、そして息子さんが牧師をしている教会Living Hope Lighthouse、そして最後はテキサスの娘さんの家族の教会CROSSROADS への教会での主日礼拝に恵まれた。

Middlecreek Christian Church は、「Hi, Bonnie ! How're you ?」と迎えられる。泉が丘教会をしばらく休むと、「村田さん、元気?」と聞かれるようなものがある。私も受洗しているのでみんなと一緒に聖餐をとる。どの国に行っても神の子には差別はない。Living Hope Lighthouse でも聖餐をとる。最後のCROSSROADS でも…。葡萄酒は、どの教会もびびりジュースだった。

礼拝が始まる前に、Middlecreek Christian Church かつ Living Hope Lighthouse



も挨拶タイムがあつて、握手したりハグしたりお互いに挨拶しあうのが楽しい。CROSSROADS では、教会が大きいのでそれはなかった。8000人の人が集まって来て4回に分けて礼拝をおこなうのである。礼拝堂というよりは、コンサートホールのような感じだった。

3か所の教会では、日本の教会では静かに始まる礼拝であるが、音楽いっぱいである。

さてどうして私は3か所の教会で礼拝を守ったのであるが、Living Hope Lighthouse で、お父さんとお母さんの孫の洗礼式に参列することが出来た。アメリカの洗礼は、水に沈められるのが多いことである。教会に洗礼槽があれば



ば教会で行うのが普通であるが、ない場合は近くの川か、池、または教会員の家のプールを解放されて施される。その日もプールで行われた。牧師による紹介に始まり、受洗者の証があつて、水に入ると誓いがあつて、そして水に沈められる。介助者は家族である。そ

して、神の子として迎え入れられた受洗者のために祈りをささげるのである。私も一人の家族として祈りの輪の中に入る事が出来たのには、感動であつた。なぜか涙がこみあげてきたその瞬間出会つた。

テキサスに移動する前の晩に食事をしたが、お父さんとお母さんが、*"What is your favorite in Pennsylvania?"*と訊いたので、今回は写真撮影も力を入れていたので、「滝撮影で行つた Bushkill Falls」だけど、何といつても Corey (孫の名前である)の洗礼が、一番脳に焼き付いた思い出だと答えた。

誰も経験できないことである。クリスチャンの家族と交流しているからこそ、家族の一員として家族の洗礼式に交われるのである。? 十萬もかけ世界一周旅行に参加してもこのような出来事には、出会えない。

クリスチャンとして、私は最高の旅行をしたのだと、喜びと感謝の祈りをささげてこの手記を終わります。 Ω



ルーティンな夏

岸本 眞

低迷の阪神タイガースを応援しなくなつて久しい。野球に限らず先日までテレビを賑わせた五輪の勝ち負けやメダルに一喜一憂する、各国にもれなく見られる国家や民族への帰属意識がどうも苦手である。

リオ五輪サッカーの決勝戦で、地元ブラジルチームのキャプテン、ネイマールが最後のゴールを決めて優勝が決まった直後に、芝生に伏して神さまに歓喜の感謝の祈りを捧げていた。表彰台上がった彼の白い鉢巻きには、「100% JESUS」(イエス様)が満ちている? (と書かれていた。じゃあ、銀メダルに終わったドイツや予選リーグで敗退した日本チームは神さまに祝福されなかったの? と、ひねくれ者の私は

つい斜めに構えてテレビを観てしまった。(実は半分感動していたのだが)
ところでスポーツ選手はよく同じ仕草にこだわる。一世を風靡したラグビーのあの選手や、五輪体操競技で金メダルを取ったあの選手が必ず見せる、手を合わせて祈る所作にも似た事前の例の仕草を、世間は「ルーティン」と呼んで流行語になっている。

ルーティンとは、「あらかじめ決めている段取りを、ある流れにそって行う所作や仕事」のことを言い、スポーツでは蹴るだの飛ぶだのの行為に先立つ一定の動作の規則性や正確性を保つための、流行の脳科学的に言えば動作に先立つ予測運動制御的な準備動作なのだろう。

こんなルーティンの喩えを、礼拝で毎週繰り返される式次第や、手を合わせて祈る主の祈りの唱和にも当てはめてしまうなんて、あまりに不信仰で罪深すぎて不謹慎極まりないとは重々わかっているのだが、五輪の録画を見た朝の今日の礼拝でそんなことをつい悪魔の囁きのように考えてしまった。ルーティンな行為は、確かに私たちにある種の安心感を与えるように思う。その行為を繰り返すことで得られ

る安堵の思いは、特に季節の繰り返しに根ざした農耕文化を育んだ日本という国に生きる民族には確かに強いだろうと思う。けれど、けれどである。

毎週の礼拝で繰り返されるひとつひとつの行為は、決してルーティンではない。いや、「繰返しではない繰返し」なんだと思う。創造主を讃美する礼拝で繰り返される祈りや讃美に伴う行為は、紀元前の旧約聖書の時代も含めて三千年の歴史を優に超えて脈々と受け継がれている。神さまが古代イスラエル民族から今に至るまで、そうするように命じられた深く意義ある行為だからである。けれどその繰り返される行為は、私たち自身が安心を得るための身勝手なルーティンな行為ではないことを私たちクリスチャンは知らされている。

幼い頃から身に染みついて暗唱している大切な大切な「主の祈り」も「使徒信条」も、礼拝の中で会衆に埋もれて唱和し始めると、知らず知らずのうちただだ訳もなくありがたいただけのルーティンの落とし穴にはまりそうになっっている自分に気づかさせられ恥じる。

私たちは(いえ私は)自分の五感を

もつてしか自分の存在の意味や罪を理解することができず、永遠の世界の創造主なる神さまと、罪の赦しの神であるイエス・キリストと、今もこの世界に働かれる聖霊の深遠な意思を正しく知ることができない小さな存在だと思ひ知らされる。礼拝の中でこそ働かれる聖霊の導きがなければ、与えられた毎週の礼拝のルーティンな行為は、知らず知らずのうちに自分の望む安寧を満たすだけの欺瞞に満ちた行為に陥ってしまう自己中心的な弱い存在であることを痛感させられる。

礼拝ごとに、聖餐ごとに、主の赦しの極みを想起するようにと、神は言われる。繰り返される礼拝は、決して儀礼の繰り返しではなく、赦された者のその都度、そしてその日ごとに新しく生かされてある感謝を繰り返し繰り返し想起させられ讃美し続ける、単調な繰り返しではないルーティンだと知らされる。

この季節になると、私は休日朝にはできるだけ早起きして、夜明けの早朝に漂う冷気の中で移ろう季節の香りを味わいたくて、ひととき公園のベンチで読書することをささやかな楽

しみにしている。

そんなとき、きまつていつもの時間になると初老の男性がやってきて、向かいのベンチにタオルをかけおむろに体操を始める、周囲に目をやるといつものように外国の人たちが集ってきて賑やかに民族音楽を流しながら剣舞を舞い始める。そしてこんなふうな毎朝の風景に空から降り注ぐように、やっと終わったけたたましいクマゼミやアブラゼミの大合唱からツクツクホウシヤコオロギの、秋の気配を告げる鳴き声が響いている。そして決まったように、激んでいた空気からやがて爽やかに丘を駆け上がってくる待ち焦がれた海風が吹き始め、季節は移ろいを見せ始める。私は朝のこんな時間とこんな場所で、繰り返し繰り返し日々新たに示されるこの世界を創られた創造主のご意志に包まれる。帰路の遊歩道では高齢の夫妻が絶妙の距たりを保ちながら黙々と歩きすれ違い、その後から夏休みの早朝サッカー練習に集まるべく真っ黒に日焼けした二人の少年が続いている。目にする早朝のいくらかの暮らしの風景も同じように繰り返し営まれている。そして私はその繰り返し返される森羅万象の現象に、遙か

悠久の創造のときのように、「神は造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めてよかった。」(創世記1章31)ことに深く思いを馳せる。

父なる神のみ言葉によって立つ世界の中を歩くとき、私がつまづき小さな感性は、日々繰り返し返されるこんな小さな出来事を通してしか創世の意味と神が創られた生きとし生けるものすべてへの慈愛の意味を見出すことができない。

だからこそ神は、こんな矮小な私に、繰り返し繰り返し、ただこう祈りなさいと教えて下さったのだらうと思う。

「だから、こう祈りなさい。『天に祈られるわたしたちの父よ、

御名が崇められますように。』
御国が来ますように。御心が行われま

すように、
天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

わたしたちの負い目を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を
赦しましたように。」

わたしたちを誘惑に遭わせず、
悪い者から救ってください。』
(マタイによる福音書 6章9〜13節)

泉ヶ丘教会は1973年、前身の泉

北・榎塚台伝道所の創設以来、40余年の歴史を重ねてきた。幾千年の間、大河のように流れ続ける教会の礼拝の営みにこの教会も連なっている。その毎週の礼拝では、欠かさずにこの主の祈りがルーティンに祈られ続けてきた。そこには単なる繰り返しではなく、週ごとに新たに与えられる神のみ言葉への讚美としていつも生き生きと新鮮に繰り返し祈りなさいと知らされ続けていることを信じる。

神は、私たちのルーティンな讚美と祈りを通じた応答として、私たちをいつも新しい命へと作り替えて下さっている。

「だから、わたしたちは落胆しませぬ。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」

(コリントの信徒への手紙二4章16節)

Ω